上田秋成『菊花の約』についての幾つかの疑問

エディタ・サビツカ
（ポーランドワルシャワ大学留学生）

上田秋成『菊花の約』の考察をしている中で、私は次の諸点について疑問を持つに至った。ここに疑問と解釈の形で、新しい見方を提出したい。

一　丈部左門と赤穴宗右衛門の関係

この二人について男色関係を考える立場がある。必ずしも定説として一般的に認められてはいないようであるが、そのように考えるのもひとつの理由があると、私は考える。まず題名の「菊」だか、「菊」には衆道のシンボルの要素があるとも言われることから、二人の間の衆道関係が暗示されているとも考えられよう。宗右衛門の重病が直ってから、二人は、固い「兄弟の盟」を結ぶのだが、それは単なる「友情」のレベルを超えていると考えられる。まず宗右衛門の出発の時、つまり別れの時の二人の「約束」の仕方と内容を、問題にしたい。

赤穴宗衛門は「必ず九月九日に帰る」という左門との約束を果たすため、一日に千里を行くことができる魂となるために、命を捨てた。この時宗右衛門は丹治に幽閉されているのだから、たとえ約束を破ることになっても仕方がないというふうに考えることもできるが、それは宗右衛門の考え方ではなかった。「一度口に出したことは命を捨てても守らなければならない」――これが宗右衛門の倫理感であったと言える。しかし考えてみると、「九月九日」という日付そのものには特に何の意味もない。

その上、約束の場面をよく読むと、すべて不自然というような感じがする。最初に左門に「いつ帰るか」と聞かれた時、宗右衛門は「おそらくともこの秋は過さじ（秋までには必ず帰る）」と答えた。しかし左門はさらに具体的な答えを要求して、「秋はいつの日を定めて待つべきや（秋の、いつという日を定めてお待ちすればいいのですか）」、「願ふは約したまえ（どうかそれを定めておいてください）」と言う。その結果赤穴は心理的に強制される形で、一番覚えやすい（意識に上りやすい）九月九日（菊の節句）

を巽んだ。

なぜ左門はその日付にそんなにこだわったのか。彼の根拠は「一枝の菊花に薄酒を備へて待ちたてまつらん」というのだが、これは理由として不十分である。本当の願いは「兄長必ず此の日をあやまり給ふな」というところにあり、これは相手に考えさせる願いだと思う。

どうしてそんなに厳しい約束を求めたのか。「友情」の関係であったら、そういう契約の条件はないと思う。左門の感情は嫉妬を含む独占欲を持ちがちな女性の意識に近いと言える。また、九月九日に左門のもとに帰らなければ、左門の生活が危機的状態におちいるわけではない。また、前に書いたように丹治に幽閉されていたのだから、もしその日に帰らなくても、左門に対して申し開きが十分できる理由を持っているのである。つまり赤穴には生き延びる可能性があった。にもかかわらず、彼は「約束の日を守る」という、それだけのために自害した。

これらのことから疑問を持つのは、二人の死生を超えた感情が「友情」にとどまったか、「愛情」というべきものであったか、ということである。

大輪靖宏氏の見解では、二人の関係は男色ではなかったという。この話は「信義と武士のモラル」に焦点を置く話である。何でもない約束というものは非常に破れやすいものであって、破っても普通はあまり気にしない。だから何でもない約束を命をかけて守ったということは、友情とモラルの証拠であると大輪靖宏氏はいう。

男色の場合、左門は復讐を遂げてから衆道の義理に従って自害すべきであるという考えがある。しかし、とにかく彼は自害しなかったから衆道ではないという論拠が成り立つかもしれないが、実は左門が自害したかどうかは分からないことである。秋成はそのことについて何も書いていない。従って二人の間に衆道の愛情関係がなかったとは言い切れないのである。

二　約束とモラルの問題

『菊花の約』の主題は武士のモラルとしての「信義」である。冒頭の文章と結びの文章は、話のわくである。「交わりは軽薄の人と結ぶことなかれ」、「軽薄の人と交わりは結ぶべからずとなん」――これは、話の目的を明示したものである。秋成は模範とすべき人間のパターンと、倫理的な人間の行動を描くつもりであろう。だから「何でもない約束」を中心にしたのだという考え方がある。武士の生き方の中の重要なものの一つが「信義」であった。「信義」とは「約束を果たすこと」、「一度口にしたことは守らねばならない」というような考え方である。どんなに不合理であってもそれを破ってはいけない。

「九月九日に帰る」という、そのこと自体としてはあまり意味のない約束を果たすために宗右衛門は自害した。そ

れを破ったところで、不都合なことは何も起こらない。国に災難も起こらなければ、左門に危険が生じるわけでもないのである。赤穴はただ左門を幻滅させないように命を捨てたのだろうか。左門が「宗右衛門は自分のことを忘れてしまったのだ」というような疑問を抱かないようにという配慮であろうか。

このことは秋成の最も基本的なアイデアであろう。友の命を救うためとか国家の災難を救うとかのために命をかけるというのなら、動機は明らかであるが、そういう場合は印象が希薄になり、話も普通の平凡なものになってしまうであろう。そこには当然死ぬべき理由があるからである。そのような動機を持たないという意味で、赤穴宗衛門の死は無駄死にと言えるであろうが、しかしそのような死によって信義を果たすことを背景にして、人間の強さと弱さを示したと言うことができる。赤穴はそれほど大きな意味を持つのでもない約束のために、自己を犠牲にして、そのことによって理想的な人間として描かれている。つまり彼の行為は模範的だとされている。

ところでここに別の問題が出て来る。本当に赤穴は死なければならなかったのか。また人間は何でもないような約束のために、死ぬまでしてモラルを守らなければならないのか。そしてそういう行為は本当に人間的だと言えるだろうかということ、これらが私にとっての大きな疑問である。

三　裏切りの問題

この作品の中の「裏切り」を三つのグループに分けて、順に考えてみよう。

A　家来に対する主人の裏切り

①　塩谷に対する佐々木の裏切り

佐々木は自分の代官の塩谷が尼子に殺されても、何の復讐もしなかった。「氏綱は外勇にして内怯えたる愚将なれば」と、宗右衛門は軽蔑している。

②　赤穴丹治に対する尼子の裏切り

尼子は自分の家来の丹治が左門に殺されても、何の復讐もしなかった。「尼子経久此のよしを伝へ聞きて、兄弟信義の篤きをあはれみ、左門が跡をも強て遂はせざるとなり」と結ばれている。

B　主人に対する家来の裏切り

①　佐々木に対する尼子の裏切り

尼子は富田城の前の城主であったが、定められた上納をしなかったために追放されしまった。その佐々木の命令にそむいて大晦日に富田城を攻めて、佐々木に任命されている塩谷を討ち死にさせた。

②　塩谷に対する赤穴丹治の裏切り

丹治は塩谷の家来であったが、主人塩谷が殺されてから

は主人の恨みを晴らすかわりに、塩谷を殺した尼子に仕えた。丹治だけでなく、多くの者が尼子に仕えている。「国人大かた経久が勢ひに服て、塩谷の恩を顧るものなし」とある。

③ 塩谷に対する赤穴宗衛門の裏切り

現代の観点から見るとこのような見方はあてにはならないかもしれないが、この視点から見るといろいろな考え方が成り立つ。

宗右衛門は丹治や他の多くの者たちのように、尼子の家来にならなかったのだから、元の主人塩谷を裏切らなかったというふうに、普通は考えられる。丹治に説得されたが断った点は、塩谷に対して忠実であったと言える。しかしそれは一つの面だけで、もう一面を考えなければならないと思う。

主君が殺された場合、家来の義務は何であろうか。義務というより美徳と言ったほうがよいが、それは復讐（仇討ち）である。殺された主人の魂は恨みが残っているから安らかに眠ることはできない。その魂を鎮めるためには、主人の死の原因となった者に復讐しなければならない。宗右衛門は普通の家来ではなかった。兵法の師であるばかりでなく、塩谷の信用を受けた親しい顧問であった。近江の佐々木のところへ密使として行ったのは、塩谷と親しい関係にあった証拠である。だから宗右衛門は当然主君のために復讐すべきであると考えられる。

復讐は宗右衛門の最初の願いであった。だから、主君の恨みを晴らす目的で、佐々木に対して「三沢三刀屋を助けて、経久を亡ぼし給へ」と要求した。けれども佐々木は何もしようとしなかったので、宗右衛門は一人で復讐しようと決めて、富田城に帰って行こうとした。その途中で加古で病気になったのであった。回復してから、彼の最初の願いは変わってしまった。「変わってしまった」というより、赤穴はもう一つの別の信義を守るために、最初の信義をあきらめたというふうに言うのがよいと思う。

赤穴は富田城に戻っても、「武士は二君に仕えず」という武士のモラルに従って、丹治に説得されても尼子に仕えることを断り、その結果幽閉された。そして左門との約束を果たすために命を捨てたのである。だから、この時宗右衛門は塩谷に対する信義を忘れた、あるいはあきらめたと言えるのではないか。私の疑問はこの場合、主君と左門とに対する二つの信義を守る方法がなかったか、ということである。

宗右衛門には、尼子が非常に力のある人物であり、もとの塩谷の家来たちが、すべて現在は尼子の家来になったことを知った。だから尼子の要求に対して断った場合、どうなるかは予想できたはずである。赤穴は兵法家として有名であったから、他の国に去ったら尼子にとって危険になるに違いない。だからもし断ったら閉じ込められるだろうということは、宗右衛門には予想できたことであった。

断れば何もできなくなる。このことを少しでも考えるならば、宗右衛門は二つの信義を守ることのできる可能性があったのである。

例えば、カムフラージュとして尼子の家来になれば、復讐を容易にできるだけでなくて、左門との約束を守ることができたかもしれないのである。けれども、もしそうすれば新しい主人の尼子を殺すということになる。うそであったも俸給を受ける立場であるから、尼子を殺したら、塩谷の魂を安らかにさせることはできるが、尼子に対して裏切り者となるであろう。これは悪循環のような状態である。

しかし宗右衛門は、さまざまのことを考えることなく、ただ友人との信義を果たすために自害した。つまり赤穴は、パブリックな信義からプライヴェートな信義へとスリップしてしまったのである。このことは最も大切な問題であると考える。宗右衛門にとってプライヴェートな約束――信義はいくら不合理であってもパブリックな約束――信義よりも大切だったのである。

C　親類の裏切り

赤穴宗右衛門に対する赤穴丹治の裏切り

宗右衛門は肯定的な主人公、丹治は否定的な主人公だというふうに考えられる。けれども丹治の裏切りを考えてみると、彼は従兄弟の宗右衛門に対する「義」と主君の尼子に対する「忠」とに挟まれ、その一方のモラルを破ってしまった。彼はそうするほかはなかっのである。

塩谷が殺されてから、丹治は他の家来たちと同じように尼子に仕えたが、その行動は常識的であったとも言える。「もとの主人はいなくなったが、自分が生きて行く以上収入が必要である。まずいけれども、新しい主人に仕えることにしよう」――恐らくこのように考えた。それは勿論非常に物質的・打算的な考え方であるが、極めて人間的であると思う。

宗右衛門が帰って来た時、丹治はすでに尼子に仕えていた。そして尼子から宗右衛門を幽閉せよとの命令が下る。丹治の立場からすれば仕方がなくて、その命令に忠実に従わなければならない。そうしなければ主君に罰されるに違いない。また彼が自分の利益を考えたとしても、それは人間として特別のことではないだろう。その結果、丹治は従兄弟の宗右衛門を自害に追い込んだ。丹治にとってはパブリックな信義の方が、プライヴェートな信義より大事だったのである。

宗右衛門と丹治は、「信義」について、対立的あると言える。丹治はプライヴェートな信義（親類）を捨てて、パブリックな信義を生かした。宗右衛門はパブリックな信義（塩谷の仇討ち）を捨てて、プライヴェートな信義のために命を捨てた。秋成の思想においては、プライヴェートな信義の方が優先されていると考えられるのである。

ところで、どうして丹治は尼子対する信義を守って、親

類への信義を踏みにじったか。本当に二つの信義を守る方法はなかったのか。左門によれば、それは可能だったのである。そのことを左門は丹治に対して「公叔座」の逸話を引いて説得し、公叔座と同じ行動をとらなかった丹治を非難している。

しかしここで公叔座の行為について考えてみると、新しい疑問が出て来る。公叔座は王に「誰をして社稷を守らしめんや」と聞かれた時、「商鞅年少しといへども奇才あり。王若此の人を用ゐ給はずば、これを殺しても境を出すことなかれ。他の国にゆかしめば必ずも後の禍となるべし」と答える。そしてその後ひそかに商鞅を呼んで、「吾、汝をすすむれども、王許さざる色あれば、用るずはかへりて汝を害し給へと教ふ。（中略）汝速く他の国に去りて害を免るべし」と言った。

この二つの行為をよく考えてみると、一つは王に対する、一つは商鞅に対する公叔座の立場が非常にあいまいである。あいまいであるばかりでなく、彼は同時に二人を裏切ったと言える。というのは王に「商鞅を登用なさらぬ時は殺しなさい」と言ったのは、友人を裏切ったことになり、商鞅に「王はあなたを雇わないので、殺されないうちに速く逃げよ」と言ったのは、王と国を裏切ったことになると、私は考える。

公叔座の行為については、もう一つ見逃せないことがある。彼はその疑わしい助言をした時、病気だったということである。重病の彼は「自分は確かに死ぬ」と思ったので、どんなことを言ってもよかったわけである。彼は助言の結果を見ないし、死後の彼とは関係のないこととして責任を取らずに済むからであるというふうに考えられる。

忠告を受けた商鞅が逃げ出せば、彼の逃走の理由は王に明らかになるだろう。「商鞅のことを知っているのは自分と公叔座である。公叔座が商鞅を逃がしたに違いない」と王は考えるであろう。しかし、その時には公叔鞅座は既に死亡しているので、彼を罰するわけにはいかないということである、と私は思う。

そこに公叔座と丹治の違いがあると思う。

丹治が宗右衛門を逃げさせたなら、主君尼子の処罰を免れることができないのは確実である。だから主君の命令に従って宗右衛門を幽閉した。丹治としてはそれ以外に取るべき、忠実な家来としての行動はあり得なかった。

四　鎮魂の問題

宗右衛門の魂は何時鎮魂されたか。あるいは鎮魂が可能であろうかという疑問について述べてみよう。

A　鎮魂が可能な場合を想定すると次のような問題がある。

①左門との約束を果たした時に鎮魂ができたとする考え

宗右衛門は約束を果たすために霊魂になったが、鎮魂されたとするならば、左門に会った時「涙を流す」こともなかったろうし、「私の心を哀れと思って欲しい」などとも言わなかっただろう。約束を果たして鎮魂されたのだったら、友と喜び合って、あの世に行くのであろう。安らかな霊魂の特徴は「涙と恨み」ではないはずである。

②丹治が左門に殺された時に鎮魂ができたとする考え

宗右衛門の恨みの根拠は、彼の自害の関接の原因になった丹治が生きていることにある。従って丹治の死は宗右衛門の恨みが晴れる機会になる。宗右衛門の霊魂は左門が丹治を殺した時に鎮魂されたと考えられる。左門の行動は宗右衛門への鎮魂のためであったと言える。

B　鎮魂が不可能な場合を想定すると次のような問題がある。

①宗右衛門の自害の根本の原因である尼子が生きているから鎮魂はできないとする考え

丹治が死んだとしても、宗右衛門の自害の本当の原因である尼子が生きている以上、霊魂は（少しは恨みが晴れたであろうが）、まだ恨みを残しているであろう。宗右衛門の霊魂がいつ安らかに眠れるかと言えば、尼子に関して二つの場合がある。一つは尼子が殺されること（これには歴史的事実との関係で問題があるが）、もう一つは尼子が宗右衛門に対して謝罪と鎮魂の営みをすることである。

②塩谷に対する信義（忠義）を捨てたから、宗右衛門の鎮魂は不可能とする考え

宗右衛門は旧主君の塩谷のために、尼子に対する復讐をすべきなのに、前に述べたように捨ててしまった。塩谷の霊魂にも恨みが残っているはずであり、その霊魂が宗右衛門の霊魂にも影響を与えるであろうから、宗右衛門の霊魂もまた鎮魂がなされないと考えられる。

以上に述べてように、『菊花の約』という作品は、私にさまざまの問題意識を投げかけた。内容の深い小説であると思うのである。

（注一）大輪靖宏『上田秋成・その生き方と文学』春秋社・昭和五十七年七月十日

指導　浮橋康彦先生

（一九九〇・一二・九）